慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「民間語源」と「学者語源」と「ことば遊び」
Sub Title	"Etymologie populaire", "étymologie savante" et "jeu de mots"
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.199(108)- 216(91)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0216

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「民間語源」と「学者語源」と「ことば遊び」

川口　順二

0. はじめに

普段深く考えずに用いることの多い「民間語源」という表現はいったい何を指すのか，キリスト教社会での中世の語源学と類似点があるようだがそれは何なのか，そしてこれらと「ことば遊び」とはどのように関係しているのか，という問題について考察するのが本稿の目的である．

1.「民間語源」

まず「民間語源」[1]という用語が何を指すのかを確認しておこう．この概念を批判的に調査した Seco del Cacho(2007)（以下 SC と略す）は次のように規定している．すなわち「一般に受け入れられている考え方によると，語を再分析して，その語の誤った語源を考えついたかまたは単に誤って他の語との関係づけを行ったために，その語の一部を他の語の類似する部分に置き換えることをいう」というものである (*ibid.* : 15).

初めて「民間語源」にテーマを絞って書かれた論文は Förstemann(1852) で，以来[2]現在に至るまで「民間語源」は一般に用いられる用語となった．Förstemann から例を1つ引こう．

(1) sintfluth[3](dt)「ノアの洪水」は sinvluot などとも綴られた語で fluth「洪水」に強意の接頭辞 sin(t) が付いたものだが，「(宗教上の) 罪」を表わす sünde[4] を喚起する形態に置き換えられて「罪の洪水」と解釈される形となった．

他言語の例も出しておこう．

(2) crayfish (eng)「ザリガニ」は crevis (afr)「同」(cf. écrevisse (fr)) からの借用語だが，最終音節を fish「サカナ」に変化させた[5].

(3) roussin (fr)「(古)（軍用・狩猟用の）去勢していない馬」(『小学館ロベール仏和大辞典』）は古仏で roncin[6] だが，roux（女性形 rousse)「赤毛の」の影響で形を変えた.

(4) poireau (fr)「ネギ」の古仏形は porreau[7] だが，poire「ナシ」の影響で第1音節が変わった.

以上は同時代の別の語に影響された結果語形が変化する典型的な例であるが，このような変化はとりわけ他言語からの借用の際に頻繁に生じると言われる[8]．Choucroute (fr)「ザウアクラウト」はドイツ語 Sauerkraut「酸っぱい＋キャベツ」に対応するアルザス語 sûrcrûte からの借用で，フランス語では sourcroute という規則形が予想されるが，実際には choucroute となった．Chou (fr)「キャベツ」の影響によるとされる例である[9].

次に miniatura (it) の例を取ろう．この語は minium (lat)「辰砂（朱紅色の顔料)」から派生した miniare (blat)「辰砂を使って描く」からの名詞で，「書物，羊皮紙，象牙の小物などに装飾として加える細密画，彩飾画」の意味に変わり，そのまま他のヨーロッパ諸語に借用されている．またこの語は微細な細密画を意味することから，語源の異なる minus (lat)「より少ない」や同系列の mini- を含む派生語の影響も加わったようで「極小な」の意味を得た．Miniatura (it, esp), miniature (fr, eng) には語形変化がないが，意味の変化において mini- が介入することが「民間語源」の項目に組み入れられる理由となる[10].

Péage (fr)「(道路などの）通行税，通行料金」は pied (fr)「足」と関係していて，piéton (fr)「歩行者」，piéter (fr)「(鳥が）地を走る」などの系列であり，pes, pedis (lat)「足」に由来することが科学的語源により知られている (Orr(1963：1-2))．しかしフランス人の感覚としては語源関係のない payer (fr)「支払う」との連結が pied との連結以上に強くなっているようである．ここで注目すべきことは語 péage の形態にも意味にも変化が生じていないという点である[11].

同様の例をもう1つ挙げると，ouvrable (fr)「労働する」（形容詞）は operari (lat)「～に従事する」の非デポーネント形に由来する ovrer, ouvrer (afr)「働く」の語幹に語尾 -able を付けた派生語である．動詞 ouvrer は現代語では œuvrer (fr)「働く」となったが，travailler (fr)(<*tripaliare (blat)「拷問する」) にとって代わられたために余り用いられなくなっている．そのため ouvrable が jour ouvrable「営業日」のような連辞において ouvrir (fr)「開く，（店などを）開く」とより強く連結していることが知られている (Nyrop(1913 : 328)). ここでも問題となる現象は語の形態や意味の変化ではなく, ouvrable を ouvrir と関係づけるという話者の心的状態にのみ関わる．

「民間語源」は基本的に意味を持たないとされることの多い固有名詞[12]においてもごく頻繁に観察される．プラトンの『クラテュロス』で論じられる言語記号の指示対象との関係が必然的なものかもしくは恣意的なものかという問題は現在に至るまで議論が尽きないが，特に人名や地名，神格名などは「民間語源」操作により必然性を付与されることで解決されることが多い．これはまた「学者語源」や「ことば遊び」の問題ともつながるので後で再び言及するが，ここでは「民間語源」が言語レヴェルを超えて現実界において様々な影響を与えるという現象を見ておこう．

Murray(1986) は様々な人種グループの混在するセントルイスでわざと道に迷ったドライヴァーの振りをして目的地までの道筋を尋ねるというテストをした．米語化が十分に行われていない道の名前を言ってもらうことでどのように発音がされるかを調べるのが目的であった．結果を見ると住民たちの発音は揺れがなく安定したものであり，例えば Bonjour は標準的スペルでは Bone Joy と書けるような発音, D'Amato は Tomato と書けるような発音であったという[13]．次いでインフォーマントとなった通行人に「なぜそのような名前になったのか」という質問をしたところ，ストーリーを語ってくれた者が数名いたという．例えば Ferrier は Fairy Air のような発音が観察されたが，名称の由来として次のような話を聞いたと報告されている．「森の妖精 (fairy) の話を知らないのかい？　森から妖精たちが出てくると，花が一斉に咲き始めて草は緑一色，すべてが静かになって空気 (air)

がきれいになるんだ．おとぎ話だね，でも本当にこれが名前の由来なんだ．このあたりの話だけど，朝早起きして道に出てこの本当にきれいな田舎の香りを感じてね，まるで一晩中妖精たちが来ていたみたいなんだ．もちろん今ではもうそんなことはない，これだけ沢山の車が通るからね，でも前は違ったんだ．本当にね．妖精の空気，そんなだったんだ．そこから来たんだ，この名前がね」(*ibid.* : 377).

Nyrop(1913 : 332-5) は [sãbɔnifas] と発音される Saint Boniface (fr)「聖ボニファティウス」が顔 face [fas] を痩せさせる消耗症を治してくれるというような俗信をいくつか紹介している．なかでもアルメニアで殉教した Saint Expédit はその生涯が殆ど知られていないが，Lourdes の彫像に刻まれた文によると急ぎの仕事がある信者たちの守護聖人だという．仕事をさっさと片付けると言う意味の動詞 expédier がこの信仰の基にあることは明らかである．

ここまで「民間語源」の例を見てきた．あまりにも多様で雑然としたこれら様々な現象のどの部分が「民間語源」によるのか，どの要素がこれらの例に共通するものとして「民間語源」に帰することができるのかがはっきりしないことは明らかであろう．

Förstemann の「民間語源」の概念は Buyssens(1965) の批判の対象となり[14]，近年でも Gobert(2002)，SC(2007) などが同様の否定的態度を表明している．一体なぜ Förstemann 以来160年間多くの研究者が用いてきたこの概念が拒否されるのだろうか．SC は「民間語源」と分類されてきた様々な現象に理論レヴェルで中立的に fénomenos de interferencia paranómica「類音による推論現象」[16]と命名し，その内部で新たな分類を提出することで「民間語源」の概念の持つ一連の問題を明らかにしようと試みた．彼は Förstemann が「民間語源」について例を多く出したものの明確な定義を出さなかったことをその後の理論的混乱の根源と見なしている．実際「民間語源」に言及する研究者たちの提出する例の多くは異質なもので，解釈についても未だ安定したコンセンサスが存在しない[17]．今まで挙げてきた例においても「民間語源」が語の形態または意味変化を引き起こすのか否か，

語源意識はどのようにして客観的に同定されるのか，言語外世界への影響は「民間語源」として処理すべきものなのかなどの問題がはっきりと表れている．他方「民間語源」の隣接概念として「類似」analogie,「理由づけ」motivation,「混成」contamination,「異語の同音化」homonymisation などあるが,「民間語源」がそれらのいずれかに所属させられることもままあり，概念は不透明なまま今日に至っている．

特に問題なのが,「民間語源」は語源の問題なのか, また「民間語源」は民間の問題なのか，という2点である．

「民間語源」は「科学的語源」の対立概念であるが, 語源は通時的研究である．ところが「民間語源」は話者の意識または無意識の中に起こる現象であり，例えば ouvrable (fr)「労働する」を ouvrir (fr)「開く」と連結させることは通時的に言語を考察することではなく，共時態においての2つの語を関連付けることである．無論共時態において共存する語Aと語Bを関係づける際古くから存在するAが過去のある時点においてBに何らかの変化を与えたということはありうるが,「民間語源」はそのような通時的考察はとは無関係であり，たとえ結果として正しい語源を同定していてもそれは偶然にすぎず，基本的にあくまで共時的な概念である．従って「民間語源」は語源説とは形容しがたい．

他方「民間」とはどのような主体を指すのだろうか．時代を反映する Förstemann の表現を再現することは無用だが, より近い Dauzat(1946) においてさえも「無知な民衆」のイメージをはっきりと感じ取ることができる．しかしながら民衆とは誰を指すのだろうか？　書き言葉と縁の遠い人々の総称だろうか？　歴史学や古文書学を専門にする研究者の中にも「民間語源」を何らかの形で実践する者がいないとは言えないだろう．ましてや宗教家や哲学者の間には歴史言語学の知識の欠如から「民間語源」を実践するような者を想像することは容易い．この問題を考えるために第2節では中世初期の語源探索の実践を考察することにしよう．現段階で言えることは,「民衆」という実体の捉えにくい総体を概念化することは困難であり，他方共時態における言語との関わりあいは個々の言語主体のレヴェルで起

こる現象であることを考えると，19世紀半ばの「民衆」の概念を21世紀に持ち越すことに困難があることが予測できよう．

2.「学者語源」

Förstemann(1852) は語源研究において「民間語源」volksetymoligie，「学者語源」gelehrte etymologie[18]，「科学的語源」wissenschaftliche etymologie の3つを区別している．本節で取り上げるのは2つ目の「学者語源」で，Förstemann(ibid. : 2) はギリシャ，ローマやドイツの学者に言及しながら，「しばしば膨大な知識を示すが同時に批判精神の欠如がおびただしく，得られた結果はほとんどが体系性も展開もない，支離滅裂な覚書の堆積にすぎない」と評しているが，これは19世紀の実証主義の考え方の現れである．

本節では中世初期のキリスト教教父，セヴィリアのイシドールス Isidorus Hispalensis (c.560-633) が古代の知識を百科事典の形で集大成して中世に伝えた主著『語源』Etymologiae 取り上げる．古代から中世にかけて文法学の一部として語源が扱われたが，イシドールスの著は特に聖職者のための教育的配慮をもって著されている[19]．文法学そして語源はこの著作を強く特徴づけている．

イシドールスが19世紀に形を整える科学的語源と最も異なるのはその目的であろう．科学的語源の目的はそれぞれの語がどのような語（語源＝etymon）に由来しどのような過程を経て現在の形態と意味に至ったのかを歴史学，民俗学，文学などを援用して実証的に調査し，言語変化を可視化することにある[20]．他方イシドールスの実践する語源は古代世界の知見をキリスト教の枠組みに沿って書きかえる過程で用いられる方法論とも言える．そこでは語とその指示対象であるモノはしばしば必然的な関係にあり，それゆえに語の持つ力，意味的原動力をより良く把握させてくれる語源を知ることが語の指すモノを理解することにつながるのである．

『語源』1, 29で著者は語源について次のように述べている[21]．1. Etymology (*etymologia*) is the origin of words, when the force of a verb or a noun is inferred through interpretation. Aristotle called this [sumbolon][22](sign), and Cicero

adnotatio (symbolization), because by representing their model it makes known (*notus*) the names and words for things. For example, *flumen* ('river') is so called from *fluendum* ('flowing') because it has grown by flowing. 2. The kowledge of a word's etymology often has an indispensable usefulness for interpreting the word, for when you have seen whence a word has originated, you understand its force more quickly $_1$. Indeed, one's insight into anything is clearer when its etymology is known $_2$（下線筆者）.

Fontaine(1988: X, 121) によると，イシドールスは下線1の文[23]で語の語源と語の本質的な価値を確立し，次いで下線2の文[24]は言葉とモノを隔てる壁を取り除く決定的な一歩を踏み出すものだと分析して仏訳に反映させている．上の引用の後イシドールスは語源には自然な命名と恣意的な命名の2種類があるとし，前者のみが現実を知る鍵になるとする．

イシドールスにとって語源は物質的・精神的な現実界を知るための重要な手段であった．『語源』の言及する内容は7つの自由学科 liberal arts に加えて医学，法律，国家・軍，市民，家族，人体，動物，宇宙，地球，建造物，鉱物，田園生活，戦争，遊び，船舶，衣服，食糧，食卓，庭仕事など多岐にわたっている．実際の内容を1つ見ておこう．

A sheep (*ovis*) is a mild livestock animal, with wool, a defenseless body, and a peaceful temperament, and it is so called from sacrifice (*oblatio*), because at first the ancients offered not bulls, but sheep, in sacrifice. (*ibid.* : XII, i, 9)

語源の部分だけに注目すると「羊」ovis の語源が「犠牲」oblatio であるという，第1節でみた SC の「類音に基づく推論現象」の極端な実践のようで荒唐無稽な思考に見えるが[25]，イシドールスにとって「語」の考察はその示す対象であるモノの真実に導くのである．それは語源文法という特殊な言説により，考察する語を語源と関係づけることで現実界をを理性的に把握する方法を示し，そこから再び理性的言説の構築可能な知的領域を切り開いていくことである[26]．

Bloch(1989) は語源を家系図と重ね合わせ，領地・財産相続の世襲制と語の語源による同定が並行する動きを示し，これが文学作品にも反映されて

いるという大胆かつ壮大な仮説を提示した．中世のエピステメーを問う上で非常に重要な示唆を与えていると思われる．

しかしながら本稿での問題は今まで考察してきた「民間語源」と「学者語源」が果して一見関係が見えにくい「ことば遊び」と結びつくのか，また結びつくならば関係はどのようなものなのかという点である．次節ではこの問題に取り組まなければならない．

3.「ことば遊び」

ここまで「民間語源」と「学者語源」について見てきたが，引用した数多くの例はそのまま「ことば遊び」として解釈可能なものである．ここに「ことば遊び」と他の2つの概念との関係が問われることになる．

「民間語源」については定義そのものがごく不安定なために他の概念と比較する際出発点で疑問が噴出する．例えばMerceron(2006)は地名に関するユーモアと想像の産物を収集して，それを次の5つの項目に分類している．(A) 地名の伝説と逸話，(B) 類似名を持つ英雄，怪物，動物による地名の説明，(C) 語呂あわせ，空想による語源，語形操作による地名の説明，(D) 紋章＋語呂合わせ，俚諺，紋章の紋様による語呂合わせ，(E) 決まり文句と地名の語呂合わせ．

それぞれについて1，2の例を見ておこう．

(A) エスパリオン Espalion (fr)（アヴェロン県）という地名について，「この名前はカロルス大帝がセヴィリアを征服したときにこの街に城壁を構築させ，セヴィリアの旧名 Hispalis (lat) または Hyspalis (lat) を取って名前にしたものだ」という古くからの伝えがある．残念ながら大帝はセヴィリアに足を踏み入れたことはなかったし，エスパリオンは当時まだ存在さえしていなかったのだ．(*ibid.*: 215)

(B1) ブザンソン Besançon (fr)（ドゥー県）の昔の名称 Bisonto と Bisentio からラテン語 bison（バイソン＝ビゾン）と解釈され，都市の紋章にもバイソンが現れている．そして Vesontionem（シーザー，BC.1c.），Visontione (Ausone, AD.4c)，Besantionem (Ammien Marcelin, 4c.) という形が確認され

ている．しかし科学的語源によるとこの都市名はケルト系のガッリア語から，またはケルト以前の語根によるとされている．(*ibid.* : 359)

(B2) フォンテヴロー・ラベイ Fontevraud-l'Abbaye (fr)（メーヌ・エ・ロワール県）[「ラベイ」は「修道院」の意味] にある修道院は Robert d'Abrissel によって建てられたが，元来はエヴロ Evraud (fr) と言う名前の強盗が近辺の森の泉フォンス fons（語幹 font-）(lat) に仲間と居を構えたことから名づけられたという．[フォンス＋エヴロ＝フォンテヴロ](*ibid.* : 400)

(C) ポワティエ Poitiers (fr)．ヴェルヌイユでは昔やってきた人たちに「この地の壺 pot を作る壺作り pottier はなぜ聖ヒラリウス saint Hilaire を守護聖人にしているのか？」という質問をして楽しんだものだ．答に窮した人たちに「なぜなら聖ヒラリウスはポワティエ Poitiers の出身だったからだ」と答えたものだった．[ポティエとポワティエの類音現象](*ibid.* : 557)

(D) カルージュ Carouge (fr)（スイス）．ジュネーヴの地域にあるこの地は19世紀以来イナゴマメの木 Caroubier (fr) の下に横たわるライオンを紋章としているが，イナゴマメの実がカルージュである．これは「民間語源」である，というのも昔の名称 villa Quatruvio(601-700)，Carrogio(1266) が示すように語源は quadruvium「四つ辻」なのである．(*ibid.* : 605)

(E) ヴェルサイユ Versailles（イヴリヌ県）(fr)（1640 ～ 20世紀）．Aller à Versailles(fr)「ヴェルサイユに行く」は「ひっくり返る，ひっくり返される」の意（Oudin, *Curiositez françoise*, 1640, p.569）[verser, renverser「ひっくり返す」の語呂合わせ]．(*ibid.* : 750)

Merceron は750ページに亘ってこのような例を列挙しているが，これは小さなサンプルに過ぎない．他方「民間語源」と形容している例も多いが，第1節で述べたようにこの概念の下に纏めるべきかは問題が残る．

いずれにしろ重要なのはある語・表現についてそれを共時態において他の語・表現と結合させるとその結合が意外性を生むことであろう．学者語源は文法学に組み入れられているために今日の言語学がいう派生や複合も語源と同列におかれる．しかしイシドールスで引いた flumen (lat) [河川] の fluendum (lat)「流れる」との関係づけは現代から見ると単純な派生にす

ぎない．むしろ ovis (lat)「羊」が oblatio (lat)「犠牲」と結び付けられる所に驚きが生じる．一般に人名，地名などの固有名詞がことば遊びの対象になりやすく語源の考察に現れやすいのは，まさに指示対象である人や土地と関係づけられる性質との間に跳躍があり，驚きをもたらすためではないだろうか．

「民間語源」や「学者語源」の節ではしばしばことば遊びと形容すべきものをあくまで語源説の問題として扱ってきたが，ことば遊びはこれらのジャンルを超えて，科学的語源にまで及ぶ．Guiraud(1982)[27] を用いて例を1つ出しておこう．

Catin (fr)「娼婦」について Bloch & Wartburg はこの語が女性名 Catherine「カトリーヌ」の愛称であり，フランス中部と西部において多く観察される「人形」の意味に依る，という語源説を提出している．それに対して Guiraud は catin が「人形」の意味で使用されるのは新しい用法であり，むしろ catin, catau, bothon, jeanneton, margo などが田舎の娘，すなわち召使として働く娘で，しかもしばしば喜劇での典型的な召使の娘の名前として登場することに注目した．そしてそこから召使の娘と娼婦との結びつきがこの語の歴史ではないかという仮説を提出する．というのも農家の娘がブルジョワの家の召使になり，それが娼婦に転落するという構図はフランス文学に繰り返し現れるテーマになっているからだという．

仮に Guiraud が正しく Bloch &Wartburg の説明が誤りであったということが証明されたと想定すると，その段階で「人形」→「娼婦」という図式は語源説として排除されることになるが，これが「民間語源」と何が異なるのだろうか？　逆に Guiraud の仮説が誤っていることが証明された場合にはこちらも「民間語源」に組み入れられても不思議ではあるまい．むしろ語源学そのものが科学と「ことば遊び」の接点で自己探索を試みていているのではなかろうか．換言すれば主観によっていずれへの分類も可能な研究活動であるという側面を持つものなのではないだろうか．

他方語呂合わせ，pun (eng)，calembour (fr) などと呼ばれる言語操作は SC が名づけた類音による推論現象 fénomenos de inferencia paronímica と基

本的に異なるところがない．ただし言語レヴェルでの類音連結を話し手が言説レヴェル，すなわちSaussureの用語を用いればパロールにおいてどのような意図で用いるか，またはそのレヴェルで聞き手がどのような解釈をするのかによってユーモアが生まれる可能性がある．「民間語源」が笑いを醸すということは聞き手（読み手）がそこにユーモアを感じ取ったということだが，語源を語る側（話し手，書き手）がそのような効果を意図していたか否かは問題にはならない．「学者語源」が笑いを誘うことがあっても，論じる側にはそのような意図がなかったことは明らかである．語源譚のもたらす驚きや新鮮さがあればあるほどユーモアの観点からは評価されるが，これが不可欠な要素でないことはいわゆる「駄洒落」が証明してくれている．

「民間語源」から出発した本論考はここで「ことば遊び」の問題に展開し，ひいては「遊び」がどのようなものなのかという新たな問題を提起する[28]．

4. 結語

「民間語源」と「学者語源」はそれぞれ語や名称の共時態における関係づけであることがはっきりしたと思われる．前者が微笑を誘うのに対して，後者が過去において軽蔑に近い感情を惹起していたことの背後には「ことば遊び」の問題があることも疑問の余地がない．しかし「学者語源」においては語源活動の目的が物事のより深い理解，聖書や古代書の読解への鍵の提供を目的としていたという事実はこの活動が極めてオリジナルで当時の学問にとって究極の姿の1つであったこととつながる．パラダイムが大きく転換した今日では「学者語源」を時代に位置づけて読解する努力が要求されるわけだが，他方読み方によってはここに「ことば遊び」を見出すこともできる[29]．「民間語源」については「民間」という表現が笑いと結びつきやすい土壌を提供しているのではないかと思われるのである．

注

1 「民間語源」は Volksetymologie (dt), folketymology, popular etymology (eng), étymologie populaire (fr), etimología popular (esp) と翻訳関係にある．なお引用語の後に略号で言語名を記す．dt ドイツ語　fr フランス語　afr 古フランス語　eng 英語　lat ラテン語　blat 後期ラテン語　esp スペイン語　it イタリア語．

2 Olschansky(1996) や SC(2007) はこれ以前に Volsetymologie という用語が他の学者によって用いられていることに言及しているが，この概念を広めるきっかけになったのが Förstemann であることは異論の余地がない．cf. hay que considerarle a él [=Förstemann], si no el padre del concepto ni el inventor del término [...], sí al menos el gran divulgador de la idea de « etimología popular », ya que nadie hasta entonces había dedicado un ensayo monográfico ni había recopilado tal cantidad de ejemplos (SC : 101).

3 Cf. Andresen(1883: 196). : Obenan steht die berühmte und unantastbare Umdeutuug *Sündflut*, die als göttliche Strafe für die Sünden der Menschen eingetretene (Noachische) Ueberschwemmung, „*menschlicher sünden sintfluot*", [...] hervorgegangen eben aus diesem *sintfluot*, eigentlich sinvluot, d.h. intensiv und extensiv große und lange anhaltende Flut [...], einer mit der Partikel *sin*, welche verstärkt oder Dauer bezeichnet, zusammengesetzten Form.

4 cf. sin (eng)

5 前半の cray- は類音語がない．このように「民間語源」では語の一部のみが類音語の影響を受け，残りが意味をなさないという現象がまれではない．Crevis (afr) 自身西フランク語の *krebitja からの借用で語根は crab (eng) にも現れる．

6 cf. rocín (esp) 及びドンキホーテの Rocinante.

7 語源の porrum (lat) に語尾 -eau が加わった形で，porrum は porro, puerro (esp)，porro (it) などに残る．日本語「ポロネギ」はイタリア語かスペイン語からの借用と思われるが未調査．

8 Dauzat(1946) は「民間語源」を「類音牽引」attraction paronymique という概念で置き換えることを主張した．語Aが類音語Bの形態をAの形態に引き寄せる現象で，A が B よりもより広く知られていて，特に派生語・複合語などの単語家族を多く持つ時に，A よりも弱い，使用頻度がより低い，より古い，熟語の中にかろうじて生き延びているような語，または単語家族を持たない孤立した新参語である借用語，専門性の高い語，特殊な発音の語などである B の形態が A と少なくとも

部分的に類似していくことを指す (*id.*: 253).

9 cf. Gobert(2002 : 23, note 28). フランス語には sauer (dt)「酸っぱい」と同源のゲルマン起源の形容詞 sur, sure があるにも拘わらずの変化である.

10 Nyrop(1913 : 327-8), Livre 8, Ch. II Etymologie populaire.

11 Reichler-Béguelin(2002) によると péage の発音 [peaʒ] が payer [peje] の影響で [pejaʒ] 発音されること，そして peyage と綴ることがが若い世代に増えていることが「民間語源」の介在を明らかにしているとされる．Orr(1963, 初出1954) の時代には起こっていなかった現象であり，本文に記したことは標準語においてのみ有効であることを知る必要がある.

12 固有名詞の意味については川口 (2011) 参照.

13 Murray(1986) は pp. 375-6 で発音記号表記を出しているが，ここでは省略する.

14 « Il y a donc lieu de renoncer totalement à l'appellation *étymologie populaire* » (*ibid* : 80).

15 SC は論考の大半を占める過去の研究の調査を2000年までとしているために Gobert(2002) は参考文献にも現れず，執筆時に読んでいたかは不明である．他方 Gobert も Olschansky(1996) への言及が見当たらない．これら3つの研究の総括が望まれる.

16 Paronimia (esp), paronymie (fr, dt), paronymy (eng) は語または分節の音的類似をいう．類音による推論現象とは次のように規定される：ciertos casos de confusión lingüística a nivel de unidades léxicas, que se observan en actos de comunicación verbal, en descripciones metalingüísticas, en la evolución del léxico y, a veces, en el plano extraverbal, y para cuya explicación se ha identificado la existencia de segmentos formales semejantes percibidos como unidades significativas (: 25). またこの現象は結果は以下のようなものである：El resultado de dicha confusión normalmente es, o bien una innovación formal y/o semántica, que puede dar lugar a un cambio léxico, o bien un cambio en la percepción de la unidad léxica, que ne comporta consecuencias observables en su uso (p.e. en los casos en que se crea una leyenda etimológica) (*ibid.*).

17 Gobert(2002) でも同様な指摘がある.

18 「民間語源」を「学者語源」scholarly etymology, étymologie savante との対立の中で後者が「科学的語源」scientific etymology, étymologie scientifique と同じものとして扱われることがあるが，ここでは3者を区別する.

19 古代の知見をキリスト教の枠組み内で再解釈する作業については例えば「怪物」の項目 (*Et.* XI.iii.1) に見られる言説を次の英訳で見られたい.

1. Varro defines portents as beings that seem to have been born contrary to nature—but they are not contrary to nature, because they are created by divine will, since the nature of everything is the will of the Creator. Whence even the pagans addressed God sometimes as 'Nature' (*Natura*), sometimes as 'God'. 2. A portent is therefore not created contrary to nature, but contrary to what is known nature. Portents are also called signs, omens, and prodigies, because they are seen to portend and display, indicate and predict future event. 3. The term 'portent' (*portentum*) is said to be derived from foreshadowing (*portendere*), that is, from 'showing beforehand' (*praeostendere*). 'Signs' (*ostendum*), because they seem to show (*ostendere*) a future event. Prodigies (*prodigium*) are so called, because they 'speak hereafter' (*porro dicere*), that is, they predict the future. But omens (*monstrum*) derive their name from admonition (*motitus*), because in giving a sign they indicate (*demonstrare*) something, or else because they instantly show (*monstrare*) what may appear [···]; and this is its proper meaning, even though it has frequently been corrupted by the improper use of writers (Barney et al.: 243-4).

20 この意味で近年盛んな文法化 grammaticalisation 研究はしばしば通時言語学ではなく,「民間語源」と並行した共時態に関わる考察に見える.

21 ここではあえて原文の代わりに Barney et al. の英訳を挙げることにする. なおこの部分については Fontaine(1988), X, p.115 の仏訳を参照.

22 ギリシャ文字をローマ字に転写した.

23 下線1の原文と仏訳：Nam dum videris unde ortum est nomen, citius vim eius intellegis. « De fait, quand on a vu d'où un nom tire son origine, on comprend plus vite sa valeur » (Fontaine, *ibid.* : 115). なお vis の解釈については Fontaine(*op.cit.*), Amsler(1989 : 138-9) 参照.

24 下線２の原文と仏訳：Omnis enim rei inspectio etymologia cognita planior est. « En effet, l'étude de toute réalité est plus aisée, une fois qu'on connaît l'étymologie » (Fontaine, *ibid.* : 115).

25 Varro も Priscianus も ovis をギリシャ語と関係づけているが, これは科学的語源の観点から見て正しい. ただし Varro は擬声語である可能性を示唆している. Cf. Maltby (2006), s.v. なお b と v の混同については Väänänen(1967: 51-2) を参照. イシドールスにはこの混同が多いが,

Maltby(1999: 444-5及び Appendix C) 参照.

26 Cf. Amsler(1989 : 133-172).

27 Guiraud(1982) は語源学の基本文献の1つである Bloch & Wartburg の *Dictionnaire étymologique du français* (Paris, Payot, 1975[6]) の語源説に対して異論を提出するという非常にオリジナルで示唆的な語源辞典であるが，実証的な語源研究に加えて話者の細やかな言語感覚を追求した興味深い書である.

28 「ことば遊び」とユーモアの関係については Raskin(2008) を，そして「遊び」については特に西村 (1989) を参照.

29 イシドールスを最もよく知る専門家の1人として名高い Fontaine も「Varro と同様に，そして後期文法学の文献を参考にしながら，イシドールスは民間語源のことば遊び jeux verbaux を排除していない」(*id.* (2000) : 288) として，セヴィリアのローマ期以前からある旧名 Hispalis をラテン語で再解釈して his palis と読みこんだことに言及している.
Julius Caesar founded Hispalis (i.e. Seville), which he called Julia Romula from his own and Rome's name. But Seville was nicknamed after its site, because it was placed in swampy ground on piles (*palus; his palis* = 'on these piles') driven deep so that it would not succumb to its slippery and unstable foundation (Barney et al. : 305).

【資料】

Isidori Hispalensis episcopi Etymologiarum sive originum Libri XX, Recognovit brevique adnotatione critica instrvxit W. M. Lindsay, 1911, Oxford, Oxford Univ. Press. *Etimologías*, Isidoro de Sevilla (2004), Edición bilingüe, Texto latino, versión española y notas por J. O. Reta y M.-A. Marcos Casquero, Introducción general por M. C. Díaz y Díaz, Madrid, Biblioteca de autores cristianos. *The Etymologies*, translated, with introduction and notes, by S. A. Barney et al., 2006, Cambridge, Cambridge Univ. Press. 兼利琢也「語源」（抜粋部分訳）in 野町啓（監修）『後期ラテン教父』中世思想原典集成第5巻，1993, 平凡社.

Varro (1938), *On the Latin language*, with an English translation by R. G. Kent, London, 2 vol., William Heinemann Ltd. *La lengua latina*, Introducción, traducción y notas de Luis A. Hernández Miguel, 2 vol., 1998, Madrid, Gredos.

【研究書，論文】

Amsler, M. (1989), *Etymology and Grammatical Discourse in Late Antiquity and*

Early Middle Ages, Amsterdam, John Benjamins Publ.Co.

Andresen, K. (1883[4]), *Ueber deutsche Volksetymologie*, Heilbronn a/N., Gerb. Henninger.

Baldinger, K. (1959), L'étymologie hier et aujourd'hui, in Schmitt(1977).

Bloch, H. (1989), *Etymologie et généalogie. Une anthropologie littéraire du Moyen Age français*, traduit de l'anglais par B. Bonne et J.-C. Bonne, Paris, Seuil.

Buridant, C. (1998), Les paramètres de l'étymologie médiévale, *l'étymologie de l'antiquité à la renaissance, Lexique* 14, Lille, Presses universitaires du Septentrion.

Buyssens, E. (1965), *Linguistique historique. Homonymie - Stylistique - Sémantique - Changements phonétiques*, Bruxelles, Presses Universitaires de Bruxelles.

Chambon, J.-P. (1986), Remarques sur la notion d'« étymologie populaire », *Tranel* 11, No Spécial : Actes du 2e colloque régional de linguistique, Neuchâtel 2-3 octobre 1986, Institut de Linguistique, Université de Neuchâtel, pp. 37-50.

Chambon, J.-P. et G. Lüdi (éds.) (1991), *Discours étymologiques. Actes du colloque international organisé à l'occasion du centenaire de la naissance de Walther von Wartburg*, Tübingen, Max Niemeyer.

Curtius, E.R. (1991), *La littérature européenne et le Moyen Age latin*, Traduit de l'allemand par J. Bréjoux, Paris, PUF. 『ヨーロッパ文学とラテン中世』, 南大路振一他訳, 1972, みすず書房.

Dauzat, A. (1946[2]), *Etudes de linguistique française*, Paris, Ed. d'Artrey.

Ernout, A. & A. Meillet (1967[4]), *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 1re éd. 1931, Paris, Klincksieck.

Fontaine, J. (1988), *Tradition et actualité chez Isidore de Séville*, Variorum Reprints, London.

Fontaine, J. (2000), *Isidore de Séville. Genèse et originalité de la culture hispanique au temps des Wisigoths*, Turnhout, Brepols.

Förstemann, E. (1852), Ueber deutsche volksetzmologie, *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete des Deutschen, Griechischen und Lateinischen*, 1.

Gobert, F. (2002), La dénomination *étymologie populaire* ou l'utopie d'une terminologie non ambigüe, *Cahiers de lexicologie* 81, pp. 5-37.

Guiraud, P. (1982), *Dictionnaire des étymologies obscures*, Paris, Payot et Rivages.

川口順二 (2011), 「固有名詞をめぐって」, 『藝文研究』 101-2.

Klinck, R. (1970), *Die lateinische Etymologie des Mittelalters*, München, Wilhelm Fink Verlag.

Maltby, R. (1999), Late Latin and Etymologising in Isidore of Seville, in *Latin vulgaire-latin tardif V : actes du Ve Colloque international sur le latin vulgaire et tardif, Heidelberg, 5-8 septembre 1997*, édités par H. Petersmann et R. Kettenmannl, Heidelberg, Universitätsverlag C. Winter.

Maltby, R. (2006), *A Lexicon of Ancient Latin Etymologies*, Cambridge (1991), Francis Cairns Ltd.

Merceron, J. E. (2006), *La Vieille Carcas de Carcassonne. Florilège de l'humour et de l'imaginaire des noms de lieux en France (Légendes, jeux et calembours toponymiques du Moyen Age à nos jours)*, Paris, Editions du Seuil.

Murray, T. (1986), Folk Etymology in the Streets of St. Louis, *Names* 34, 4.

西村清和 (1989), 『遊びの現象学』 勁草書房.

Nyrop, K.R. (1913), *Grammaire historique de la langue française,* t.4, Copenhague, Gyldendalske Borhandel Nordisk Forlag.

Olschansky, H. (1996), *Volksetymologie*, Tübigen, Niemeyer.

Orr, J. (1963), *Essais d'étymologie et de philologie françaises*, Paris, Klincksieck.

Palmer, S. (1890), *Folk-etymology. A dictionary of verbal corruptions or words perverted in form or meaning by false derivation or mistaken analogy*, New York, Henry Holt and Co.

Pérez-Simon, M. (2011), De la légitimité de l'argumentation étymologique au Moyen Age, communication à *Illegitimate argumentation in western intellectual culture, from St Alselm to Isaac Newton*, Poletayev Institute for Theoretical and Historical Studies in the Humanities, Moscou, 5-8 septembre 2011.

Pfeifer, W. (1999[2]), *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen* (1989).

Pisani, V. (1975), *Die Etymologie. Geschichte-Fragen-Methode*, Deutsche Übersetzung der zweiten, durchgesehenen und erweiterten Auflage (Brescia 1967), München, Wilhelm Fink Verlag.

Prieto, P. M. (2005), Isidoro de Sevilla a los límites del conocimiento: etimología, astrología, magia, *Temas medievales*, 13.

Raskin, V. (ed.)(2008), *The Primer of Humor Research*, Berlin, Mouton de Gruyter.

Ray, A. et al. (1993), *Dictionnaire historique de la langue française.*, Paris, Robert.

Reichler-Béguelin, M.-J. (2002), Etymologie « populaire », jeux de langage et construction du savoir lexical, *Semen* (en ligne), 15.

Room, A. (1988), *A dictionary of true etymologies*, London, Routledge.

Schmitt, R. (Hg.) (1977), *Etymologie*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Seco del Cacho, J. M. (2007), *El problema conceptual de la etimología popular. Estudio cronológico y análisis de diccionarios especializados en lengua inglesa*, Memoria para obtener el grado de doctor Universidad complutense de Madrid, Facultado de filología, Depto. de Filología Inglesa I.

Wartburg, W. von (1931), Grundfragen der etymologischen Forschung, in Schmitt (Hg) (1977).

Väänänen, V. (1967), *Introduction au latin vulgaire*, Paris, Klincksieck.

Vendryes, J. (1955), Sur l'étymologie croisée , in Schmitt (Hg.) (1977).

Zumthor, P. (1975), Etymologies, in *Langue, texte, énigme*, Paris, Editions du Seuil.